

がん患者支援 2 団体助成

仕事帰りに集えるサロン



「同じ病気の人を支えたい」と語る前田さん

京都ワーキング ☆サバイバー

(南区)

乳がんを経験した医療法人職員の前田留里さん(43)が中心となり、2015年9月に発足した。前田さんは38歳の時、乳房にしこりがあることに気づいた。乳がんと診断され、部分切除。「一般的に40歳代後半から発症の可能性がある病気と聞いていただけに、ショックだった」と振

り返る。がんにかかり、「人生には限りがある」ことに改めて気づき、同じ病気の人たちを支援したいと思うようになった。既存のがん患者団体は平日の昼間に会合を開くことが多く、30〜40歳代の働く女性が仕事帰りに集える「サロン」を思いついた。

毎月第2水曜の午後6時半から、中京区のビルの一室を借りて開いている。毎回5、6人が参加し、仕事を続けながら治療する難しさや自分の経験談などを話

り合う。参加する女性(44)は、「ほかの患者らと触れ合う中で、気持ちの前向きになった気がする。ひとりで悩まず、ぜひサロンに参加してみたい」と話す。

現在は女性限定だが、今秋をめどに、男性患者を対象にしたサロンの開設も検討している。前田さんは様々な取り組みを通じて、がん患者への理解を高めた「い」と話している。

問い合わせは、メール(yotoworking@yahoo.co.jp)。

正力厚生会

公益財団法人「正力厚生会」が公募した2016年度がん患者団体助成事業の交付対象に、府内からは「京都ワーキング☆サバイバー」(南区)と「しまうまサークル@関西」(右京区)が選ばれた。



「Zurui厚生会」の代表理事、しまうまさん

しまうまサークル @関西

(右京区)

神経内分泌腫瘍(NET)の患者とその家族らで2012年11月に結成。専門医の講演会や患者間の交流に取り組んできた。

NETは神経内分泌細胞に由来する腫瘍の総称。内分泌細胞ががん化し、ホルモンや神経伝達物質が過剰に分泌されることで、体内に様々な異常が生じる病

気。肺や胃、膵臓などで発症する。

年間の発症率は10万人あたり5人と患者数は少ないが、近年は増加傾向という。世話人の原敦子さん(58)も10〜11年にNETの手術を経験。会社の健康診断がきっかけで直腸に腫瘍が見つかった。

「自覚症状もなく、はじめは軽く考えていた」というが、術後は後遺症や転移の恐怖に悩まされ、うつ状態に。しかし、家族や主治医に支えられて復職。「病

極的に取り組むようになった」と話す。

その一つが患者会の設立だ。発症数が少ないため病気の情報が得にくく、情報交換や悩みを共有する場がなかった。現在の会員は約70人。今秋にはホームページを作成し、最新の治療動向や患者の体験談などを掲載していく予定だ。

原さんは「病気を抱えていても、人生を楽しみたい」と前を向く。

問い合わせは、メール(himaunacircle@yahoo.co.jp)。

NET情報交換、悩み共有